HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	奥寺龍渓のボーイスカウト論に関する研究 ： 英国規範の受容とアダプテッド・アスレティシズム［全文の要約］
Author(s)	石立, 克己
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16306号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95223
Type	doctoral thesis
File Information	ISHIDATE_Katsumi_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文の要約

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：石立　克己

学位論文題名

奥寺龍渓のボーイスカウト論に関する研究

―英国規範の受容とアダプテッド・アスレティシズム―

本研究は奥寺龍渓（1877－1936 年）のボーイスカウト論を通して、ボーイスカウト運動にみる英国的スポーツ規範の日本的受容を明らかにすることを目的とする。

奥寺龍渓は現在のボーイスカウト日本連盟の前身である少年団日本連盟にて主事、参事、健児部国際班長を務め、しばしば第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期においてスカウト教育理論の形成を果たした人物であったと言及されている。本研究では、こうした奥寺のボーイスカウト論を英国的スポーツ規範「アスレティシズム」の受容という観点から分析していく。

アスレティシズムとは「集団スポーツを人格陶冶のための有効な教育手段として重要視する態度」であり、19 世紀後半の英国で確立したエリート中等教育機関、パブリックスクールのスポーツ教育イデオロギーを意味する。パブリックスクールから輩出されたエリート層の多くは大英帝国の植民地行政官となり、集団スポーツを通じて彼らは「肉体的、精神的勇気、忠誠心、服従、協同の精神、自己犠牲、義務感」を体得し、アスレティシズムは帝国を支える精神的支柱の形成に関与したとされている。そのため、アスレティシズムはエリートと労働者階級とを区分し、植民地においては、植民地の現地人と植民地行政官らを区別するための文化的な階級理念にも相当していた。このことはアスレティシズムが単なるエリート学校における排他的なスポーツ教育思想を意味するだけでなく、大英帝国を越えて地理的にも伝播したことを示すものでもある。

しかも、アスレティシズムの伝播過程は C. Hickey によって、階層縦断的な側面からも論じられている。すなわち、英国における第一次世界大戦期の総力戦体制の中で、アスレティシズムが質的な変化を伴いながら労働者階級を包摂し、英国民全体を包括しえる普遍性を帯びたと Hickey は指摘した。このことは「ゲーム崇拝」により、エリート教育機関を通じてアスレティシズムが帝国主義的軍事的役割を果たしたとする従来の見解を初等教育、労働者階級を含む社会教育ルートから補強する意味も伴った。より具体的に、Hickey は小学校教育やボーイスカウトなどの社会教育を通じてアスレティシズムの範囲が拡大したと捉え、「下からの原動力、特に労働者階級によって形成されたアスレティシズム」をアダプテッド・アスレティシズム Adapted Athleticism（以下ではアダプテッド・アスレティシズム）と表現し、アスレティシズムがパブリックスクールのようなエリート教育機関のみに適合するのではなく、可塑性を伴って伝播したことについて論じた。加えて、スポーツ規範が表向きに醸し出す政治的中立性は第一次世界大戦以降の国際秩序の中で外交を通じた宥和政策にも少なからず貢献したという指摘もある。

それゆえ、日本における奥寺のボーイスカウト論について検討することは、ボーイスカウト運動の発祥国であった英国のスポーツ教育規範、とりわけスポーツ教育イデオロギ

一、アスレティシズムが英国のエリート教育機関の内部における教育思想の枠を地理的にも階層縦断的にも超えて、どのように持続・変容・普遍化したのかを問うことに等しい。

すなわち、Hickey のいう英国における労働者階級の包摂という階層縦断的な垂直方向へのアスレティシズムの拡大と戦間期のボーイスカウト運動に見られたような国際平和を達成するためのスポーツ規範を通じた市民教育という文化横断的な水平方向での地理的拡大という２つのアダプテッドな可塑性は、大英帝国を離れてもたらされたその余波の到来と捉えられる側面がある。このことは、アスレティシズムをパブリックスクールという閉鎖的なエリート空間のみで共有された理想、若者を第一次世界大戦に躊躇なく志願させ、戦場での悲劇を生んだアスレティシズムの功罪を超えて、その多様な影響力を示すことにもつながる。

しかしながら、階層縦断的な労働者階級への伝播と大英帝国を越えた文化横断的伝播の双方にみるアダプテッド・アスレティシズムを意識しつつ、スポーツ教育思想としてのアスレティシズムが、スカウト運動を通して日本に伝播した過程の詳細については、これまで明らかにされていない。それゆえ、本研究では奥寺のボーイスカウト論を、英国内において階層縦断的な伝播を通して消化された「市民教育としてのアスレティシズム」（垂直方向）の大英帝国外への横断的な地理的拡大（水平方向）として論じることに意義を見出した。

なお、奥寺龍渓は少年団日本連盟にて主事、参事、健児部国際班長を務め、100 編以上のボーイスカウト論に関する記事、6 冊の単著を執筆した。そして、少年団運動に関する通史を描いた田中治彦によれば、奥寺は主に英国ボーイスカウトの教本の翻訳者として知られ、「草創期の少年団運動にあって英国のボーイスカウトの著作を多数翻訳し、ボーイスカウトの理論面でその基礎を作った」とされている。実際、奥寺と同時代人である三島通陽は、乃木希典らによって英国から紹介され、二荒芳徳らによって創設された少年団運動の中で、「文献的方面に、絶えざる努力を惜しまなかった、大なる功労者である」奥寺が「ボーイ・スカウトの精神並びに教育法」の紹介といった役割を果たしたと述べている。このように先行研究の中で初期のボーイスカウト論の理論形成に果たした役割が指摘され、同時代人による奥寺の功績に対する賛辞が存在しているにもかかわらず、以下の圓入智仁の指摘にあるように、これまで奥寺について詳細な研究はなされてこなかった。圓入は「‘教育に志して、教職に就いた’こと、英国のパブリックスクールの‘訓育’を研究する中で、‘大正元年頃’にボーイスカウトの存在を知り、実施したことを［奥寺は］述べているが、この他の学歴や具体的な職歴は明らかではない」(‘’は原文では鍵括弧)と述べている。上述の指摘は、奥寺が英国のパブリックスクールにおける教育思想の探究を通してスカウティングに関心を抱くに至ったにもかかわらず、その経緯は詳細に論じられてこなかったことを示している。実際、奥寺は「私の求めている、パブリツク・スクールの訓育の原則が、簡単明瞭に、しかも平易に行はれるように要点を握っている」のがボーイスカウト運動であるとして、パブリックスクール教育とボーイスカウト運動との連続性に言及している。本研究が英国規範の受容とアダプテッド・アスレティシズムの関係を通じて、奥寺のボーイスカウト論を明らかにしようとする理由がここにある。

それゆえ、これまで詳細に論じられてこなかった奥寺のボーイスカウト論を通じて、大英帝国からの市民教育の拡がり、グローバルに拡大したスカウト運動を把握し、日本における英国規範の受容の在り様を明らかにするには、階層縦断的および地域横断的方向からの検討が必要ということになる。よって、冒頭で言及の通り、Hickey が提唱する労働者階級の包摂に基づく階層縦断的な垂直方向へのアスレティシズムの拡大と、国際平和の実現を目的とした市民教育の地理的拡大という文化横断的な伝播という二つの「アダプ

テッドな可塑性」の在り様に注目する必要がある。

したがって、第一部は「ボーイスカウト運動と奥寺龍渓」と題し、アダプテッド・アスレティシズム概念を用いて、奥寺のスカウト教育論が英国の市民教育およびスポーツ教育思想の影響を受けて構築されたことを明らかにした。これにより、スカウティングを通じたアスレティシズムの市民教育への拡がりは、英国内の場合、労働者階級へのアスレティシズムの拡大であったが、日本の場合はエリート教育から社会教育を通じた階層縦断的なルートを問題にするだけでなく、国際的な動向と連動した大英帝国の外で展開された「水平方向の可塑性」の問題を合わせて論じる必要があるということになる。

そこで、第一部で展開した 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての英国規範の受容の問題を踏まえた奥寺のボーイスカウト論に加えて、第二部「国際主義と奥寺龍渓」では、戦間期の国際協調主義の中で日本におけるアダプテッド・アスレティシズムが直面した新たな局面について、奥寺の国際主義論を基に検討した。特に、1941 年に少年団日本連盟が解散し、大政翼賛体制に組み込まれたという史実を踏まえ、奥寺のスカウト教育論と国際主義の関係性について分析した。次いで、1920 年代に浸透した国際協調主義が、日本のスカウト運動に与えた影響やファシズム体制下で英国的な規範意識が直面した変化について論じた。つまりは、水平方向の拡大の一部として日本におけるスカウト運動を捉える際、その社会文化的脈絡に応じた再構築の在り様は、第一次世界大戦前後のボーイスカウト運動における方針の変化、特に「国際主義への転換」と呼ばれる、それまでの国家主義的・軍事主義的傾向から中道的で国際協調主義的な方向への転換とかかわったことを示すことに相当する。このため、日本におけるスカウト運動を問題にする際、1920 年代以降に本格化したことが重要であり、第二部ではナショナルとインターナショナルが交錯する中での奥寺のスカウト教育論について論じた。

「第一章　ゲーム崇拝と銃後のアスレティシズム」では英国のエリート教育機関であるパブリックスクールのスポーツ教育思想であったアスレティシズムが、どのようにしてエリート層から市民教育へと広がりをみせるに至ったのか、次いで、奥寺がボーイスカウト運動と出会う以前に接触していた英国由来の市民教育理念がどのように奥寺のスカウト活動に影響したのかについて論じた。具体的には、エドワード朝期から第一次世界大戦期にかけて生じたアスレティシズムの帝国主義的拡大が果たした役割を概観し、次いで英国における労働者階級の包摂、すなわち、階層縦断的なアスレティシズムの歴史的意義や、ボーイスカウト運動を通してアスレティシズムが労働者階級を包摂する過程で生じた市民教育への適合過程について分析した。これらを受けて、元来英国におけるエリートに固有のスポーツ教育思想、アスレティシズムが労働者階級のための社会教育に適合することで、英国から遠く離れた日本において、いかにして、スカウト運動と出会う以前の奥寺を動機づけることにつながったのか、奥寺の母校である青森県第二尋常中学校、東京高等師範学校の本科における教育内容や、同校を卒業して以降の東京府立第三高等女学校における奥寺の教育活動をもとに論じた。奥寺は出身校である青森県立第二尋常中学校において、青森県の自由民権運動と関わった恩師西舘武雄からの英国的 Citizenship の薫陶を受けており、東京高等師範学校の本科にてアスレティシズムと一体であった英国スポーツを体験していた。しかも、彼は後年学生時代に受けた影響について、「私が、この本［『ボーイスカウトの精神』］を書いたという動機は、遠く私の中学時代に遡る」、加えて、「西舘校長は、一日教室で、英国の Citizen とか、Citizenship とかいう英語を黒板に書いて話をされた」と回想するなど、スカウト運動が日本で制度的確立をみる以前にすでに奥寺が英国規範に動機づけられていたことが判明した。

このことは、奥寺のボーイスカウト論が英国由来のスカウト教育の日本への単なる到

来を意味するだけでなく、英国のエリート層の階級意識と深く関わっていたスポーツ教育思想であり道徳規範であったアスレティシズムが英国内においてどのように市民教育に転換され、大英帝国領内を超えて普遍化したのかという、縦断的かつ横断的な拡大の双方に関わることを意味している。

「第二章　英国規範の受容過程―『帝国青年』（1916－1922 年）にみるボーイスカウト論」では帝国青年出版所より発行の月刊誌『帝国青年』（1916－1922 年、1923 年より『青年』と改称。第 7 巻第 12 号まで発行された）にみる奥寺龍渓のボーイスカウト論について明らかにすることを目的とした。具体的には、奥寺とボーイスカウト運動との出会い、設立当初の官製青年団と奥寺の関わりを踏まえつつ、青年団中央部における奥寺龍渓の活動を『帝国青年』誌に奥寺が「バーデン・パウエルの英国青年団」（1920 年 5 月－921 年 5 月）を連載していた時期と、1921 年以降の青年団のみならず、修養団や文部省社会教育局などの社会教育団体との交流を開始した時期とに区分して分析した。

第二節「奥寺とボーイスカウト、官製青年団」では、少年団日本連盟の機関紙『少年団研究』における奥寺自身の記述から、少年団日本連盟が設立される以前の彼の活動について、特に彼とボーイスカウト運動との出会い、設立当初の官製青年団と奥寺の関わりに着目して分析した。ついで、第三節「『帝国青年』におけるスカウト運動の展開」では、『帝国青年』におけるボーイスカウト論の内容を分析した。『帝国青年』は、内務省・文部省より発せられた訓令「青年団ノ指導発達に関する件」（1915 年）を機に、1916 年に全国の青年団体を統一する目的で半官半民の教化団体である中央報徳会の青年部より刊行された。同誌は 1920 年に第 1 回世界ジャンボリーが開催されたことを契機にボーイスカウト運動に注目し、1920 年 2 月から 1921 年 5 月にかけて毎号、スカウト運動に関する記事を掲載している。奥寺もまた 1920 年 5 月から 1921 年 5 月までの 1 年間、「バーデン・パウエルの英国青年団」を連載していることから、この時期を第一の時期区分とした。

次いで、1921 年以降、奥寺は青年団のみならず、修養団や文部省社会教育局などの社会教育団体との交流の足跡を『帝国青年』に投稿していることから、後者を第二の時期区分として分析した。そして、「第四節　少年団日本連盟の結成と青年団批判」では、第二の時期区分にて奥寺がボーイスカウト運動と日本の青年団とを比較し、国際的な訓練や平和維持の理念を強調していたことについて論じた。この時期、奥寺は青年団の活動を「砂利まき、夜警」と表現して批判し、スカウティングの国際性と平和教育を重視する姿勢から、青年団ではなく少年団運動に接近していたことが判明した。なお、この時期の彼の活動を把握する上では、彼が寄稿していた『帝国青年』以外の雑誌や少年団日本連盟から出版された著作についても分析した。

結果、青年団と少年団を跨ぐ奥寺の活動の背景には、英国由来の市民教育を、ボーイスカウト運動を通じて、日本における社会教育に浸透させようとする信念があり、奥寺は、青年団を通して在郷軍人会との結びつきとの強化を進める動向や社会奉仕一辺倒の修養を重視する社会教育とは距離を置き、「最高の競技」の倫理的意義、遊技を通じた社会教育に執拗に拘ったスカウト教育論を展開していたことが明らかになった。

「第三章　『列強少年の社会教育』（1923 年）にみるスカウト・ゲーム及び「遊技」に関する研究」では、スカウト・ゲーム、「遊技」の陶冶性を重視した奥寺のスカウト教育論を、奥寺龍渓著『列強少年の社会教育』（1923 年）における記述をもとに分析した。「スカウティングは主知主義に基づくのではなく、ゲームを通してその精神を普及することにある Scouting is not a Science, it’s a Game」。この一文はベーデン・パウエルによって創始されたスカウト運動の基本方針を示すものである。そこで、本章では、奥寺が英国由来の市民教育を、日本に浸透させるうえで、どのような教育論を用いたのか、奥寺龍渓著『列強少年の社会教育』（1923 年）にみるスカウト・ゲーム、「遊技」（奥寺は「遊戯」

ではなく「遊技」の語を用いる）を通して分析した。

なお、遊戯、ゲームの重要性は奥寺のみならず初期の少年団運動においても認識されていたため、第二節「少年団日本連盟における遊戯について」では、奥寺による『列強少年の社会教育』の書物の内容について論じる前に、設立当初の少年団日本連盟が紹介した遊戯の特徴について触れた。具体的には、ベーデン・パウエル著、少年団日本連盟訳『少年団教範(スカウティング フォア ボーイズ)』（1925 年）、深尾韶著『スカウト読本』（1925 年）の二つの教範を分析し、そこに見られた遊戯の内容について論じた。なお、『少年団教範』は英国ボーイスカウト運動の教範書である Scouting for Boys を訳出であったのに対し、深尾の著作『スカウト読本』は翻訳書ではなかったため、両書を通じて、1920 年代の少年団日本連盟がどのような遊戯の実践を求め、遊戯をどのように位置づけていたのかを明らかにした。

これに対し、奥寺の『列強少年の社会教育』は、スカウト・ゲームを運動強度や実践する場所ごとに「動的室内遊技」、「静的室内遊技」、「運動場及野外の遊技」、「一組遊技」、「斥候遊技」、「対抗競争」、「対抗競技」、及び「スポーツ」といった区分に分類し、細かくスカウト・ゲームに求められる教育効果を分析するなど、英国スカウト運動の用語と自国語の間隙を埋めようとしたものであった。よって、第三節「『列強少年の社会教育』にみる奥寺龍渓のスカウト論」では、奥寺著『列強少年の社会教育』（1923 年）を通して、奥寺がスカウト教育において、遊び、ゲームをどのように認識していたのか、以下の 3 点を明らかにした。

①奥寺は、少年団による教育の対象を 9-12 歳の年齢層の小学生徒とし、「少年本来の欲求を満足させることが出来」、学校教育を補うために、遊技による少年団の「人格的訓練」が有効であると考えていた。

②遊技による教育を実施する上で、スカウト運動を英国由来の「スポートの精神」に求め、身体性を伴うこと、「全体が終始参加すること」、競技性を重視した。

③「動的室内遊技」など、集団全員の参加を可能とし、競技性を有した少年団における「遊技」を、スポーツ、スカウト・ゲームの準備段階の教育として位置づけた。かつ、スポーツ、スカウト・ゲームによって培われる道徳性、精神性を「真の人格陶冶」と称賛し、少年団の主な対象となる小学校年代の子ども達には、「遊技」を通じて、スポーツ教育に段階的に移行することを説いた。

それゆえ、『列強少年の社会教育』（1923 年）は遊戯と競技の中間にあった「遊技」を少年団の教育として重視し、英国のスカウトに忠実でありながらも、戦前の初等教育段階の子どもの年齢区分に応じたスカウト・ゲームを「遊技」を通じて、普及させるものであったと言える。このことはすでに 1930 年代にはヨーロッパで知られていた J・ピアジェの言う発達段階に応じた認知発達学と同時代的にもアナロジーがある。奥寺が理論化した「遊技」は少年団日本連盟の指導者養成会の講師であった奥寺によって伝えられ、同書は少年団日本連盟から少年団指導者検定の参考書として指定され、指導者向けの教本として活用されていた。その後、奥寺は、少年団日本連盟の機関紙『少年団研究』を中心に、少年団のスカウト化を理論面で支え、英国由来の「スポートの精神」を模範としたスカウト運動の在り方を普及し続けた。

以上を通じて、第一部では 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての英国規範の受容の問題を踏まえた奥寺のボーイスカウト論について分析した。彼は市民教育への関心を起点として、パブリックスクールのスポーツ教育思想に注目し、「パブリツク・スクールの訓育の原則が、簡単明瞭に、しかも平易に行はれるように要点を握っている」ものがスカウト運動に相当すると認識していた。また、パブリックスクールに由来するアスレティシズ

ムを通じたスポーツ教育を理想としつつも、競技と遊戯の中間にある「遊技」を少年団における教育として重視していた。このことは、第 1 章で論じた英国におけるアスレティシズムの縦断的な変化、すなわち、労働者階級の生活環境に適合するために、アスレティシズムに見られた過度に集団スポーツ中心の在り方とは異なる英国スカウト運動の方針を、奥寺が正しく理解していたことを示している。つまり、第一章で論じた英国ボーイスカウト運動における階層縦断的なアスレティシズムの拡大が日本でも、奥寺によって忠実に受容されていたといえる。

言い換えると、日本においてもエリート教育機関におけるスポーツ活動の場にとどまらず、市民教育に適合されたアスレティシズムが奥寺を通して紹介されていた。したがって、奥寺のスカウト教育論は、英国のスポーツ教育思想であったアスレティシズムの受容過程とその適応、すなわちアダプテッド・アスレティシズムの歴史を示している。

続いて、「第四章　ボーイスカウト運動の国際主義と奥寺龍渓」では奥寺が英国の市民教育理念に基づき、日本においてスカウト運動を通じて国際主義の理念を浸透させようとした過程について論じた。奥寺とボーイスカウト運動の国際主義との関わりを論じる上で、第二節「世界ジャンボリー―国際主義への離陸」では、戦間期におけるボーイスカウトの「国際主義」とはいかなるものであったのか、その概念整理を試みた。なお、近年のボーイスカウト運動史研究では、創始者や国際本部のイニシアティブだけでなく、各国のスカウト団体や個々のスカウトとの関わりを通じて運動を再評価する必要性、大英帝国内の階層構造に依拠するのではなく、第一次世界大戦後の「国際主義」の元で、植民地や周辺諸国がスカウト運動に参加することで生じた独自性に着眼している。日本の場合、横断的な比較研究よりも一国史に基づく独自性の脈絡が主流であった。これに対し、スカウト運動における奥寺の国際主義の捉え方について論じることで、本研究では対外的な脈絡を含むその独自性の相対化を試みた。

具体的には、第三節「ファシズム下のイタリア、ドイツにみる社会教育への戸惑い」にて、ファシズムの台頭する中で執筆された一連の奥寺の論稿、「採用か脱化か I－III」を分析した。結果、独伊のナショナリズム一辺倒の側面を批判し、奥寺は国情に応じた適応と国外との連携の双方を重視したことが明らかになった。このことから、奥寺はファシズムが濃厚になる時代においても、なおも国際主義に重きを置いていたことがわかる。奥寺にとって、スカウト運動は国家の枠を超えた青少年教育の場であり、ナショナリズムと国際協力が共存し得る市民教育の基礎をなすものであった。しかも、第三章で論じた通り、奥寺にとって、その実践とは日本における少年団を通じた国際社会に貢献するためのアスレティックな教育理念、特に遊技を通じたスカウト教育に他ならなった。それゆえ、先行研究で示された諸外国におけるスカウト運動の多様な展開という視点―すなわち英国スカウト運動の理念が各国の文化的・政治的背景に適応した第一次世界大戦後のスカウト運動の「アダプテッド」な拡大―から考察すると、奥寺の国際主義論とは、普遍的な国際主義の単なる翻訳ではなく、日本のスカウト運動を独自の形に「適応（アダプテッド）」させた国際主義に基づくものであったといえよう。

「第五章　ファシズムへの抵抗―「訓練の仕組」、「訓練の組立」（1934－1936 年）」では満州事変以降の少年団運動の国粋主義化路線を奥寺が容易に受け入れたのか否かについて、『少年団研究』における彼の連載、「訓練の仕組」、「訓練の組立」をもとに論じた。すなわち、前章までに論じた奥寺のボーイスカウト論の特徴、①英国パブリックスクールにおける市民教育に由来し、②戦間期にみられた国際協調主義を重視した、③「遊技」によるスカウト教育論が 1930 年代以降にどのように持続し、変化したのかについて分析した。

なお、1930 年代以降、少年団日本連盟では、永田鉄山陸軍中将（1884－1935 年）らの好戦派の主張が繰り返され、満州事変以降はスカウト・ゲームを楽しむという運動の在り方から「戦場地での後方支援部隊の戦士」として少年が動員されるように転じたと先行研究では言及されている。このことはスカウト運動が 1920 年代に掲げていた国際平和主義の破綻を意味した。こうした中で、先行研究によって「国際平和主義と国防国家主義」の中庸論者であるとされた奥寺のボーイスカウト論は時代錯誤のものとなったとされている。以上の指摘を踏まえて、本章では奥寺が少年団運動の「国粋主義化」路線とどのように向き合ったのかについて検証していった。

1934 年 1 月から 1935 年 6 月まで連載された「訓練の仕組」において彼は、少年団に国家権力の介入が進む中でも、軍事教練や学校教育とは異なる「公民教育」としてのスカウト運動の在り方を掲げ、人格、技能、健康、奉仕の 4 つを重視した教育を提唱している。このことは、少年団運動が国粋主義化する中においても、奥寺が英国由来の市民教育とスカウト教育の独自性を維持しようとしたことを意味する。

しかも、晩年に展開した絶筆「訓練の組立」において、奥寺はヒットラー・ユーゲントやバリラ運動を批判し、英国の「ボランタリズムの伝統」に基づく自主的な奉仕精神を日本に浸透させる必要を説いた。さらに、彼はスカウト運動を通じた自治と市民教育を強調していた。以上は「同じ教育の目的で、同じ訓練法を採用しながら、敢て英国の範に捉われず、英国と協力」するスカウト教育の在り方、という奥寺の言葉に現れている。この点は、彼が日本独自の「アダプテッド・アスレティシズム」の在り方を模索していたことを示すものであった。奥寺は英国における「憲政数百年の試練」によってボーイスカウトが自治的に運営されているとして、日本のみならず、カナダやオーストラリアのような英国植民地においてすら、理想的なスカウト教育を導入することは単純ではないと述べ、日本における正しい受容の在り方―アダプテッドな―必要性の覚悟を強調していた。しかも、彼は「スカウト訓練は深奥難解の科学でない。正しく理解するならば、寧ろ、愉快なゲームなんだ」と主唱する。こうした個々の遊技にこそ、彼の考える国際主義に即した公民訓練運動の奥義があるという理念は今日的な体育学の深淵を想起させる。そして、彼は、スカウト運動とは競技やゲームを通じた自治とシティズンシップの教育であると繰り返し強調するのであった。

日本でのスカウト運動の導入に独自の工夫が必要という奥寺の主張はボーイスカウト運動史にみる国際主義に関する近年の研究動向、すなわち、「英国本国からの影響力に基づく階層化」を踏まえた方法論的視座を想起させるものがある。つまり、奥寺は英国を基調としつつも、英国とは異なる国民性、国情に合わせた日本流「アダプテッド・アスレティシズム」の在り方を模索していたことが、彼の米国におけるスカウト運動の受容過程に関する論述から汲み取ることができた。しかし、このことは英国流に倣うということとも矛盾していない。なぜなら、奥寺は同時代のドイツやイタリアでの軍事的集団訓練とは区別し、班制と競技を通じてスポーツマンシップを養うこと、公正さを学ぶことの教育的効果を強調した。つまり、スカウト運動における英国パブリックスクール教育由来の自律性を尊重する班制教育の正当性を日本が選択すべき曲げてはならない遊技の本質であるとした。こうして奥寺は彼にとっての最後の連載「訓練の組立」を通して、日本におけるスカウト運動の独自の役割を確立するには、英国の自治、競技の教育を取り入れつつ、日本の国情に合わせて適応した（アダプテッドな）スカウト運動の在り方を模索していたといえる。

なお、よく知られているように、Vanessa Andreotti が批判の対象としたのは“Soft Global Citizenship”であり、彼女によれば、“Soft Global Citizenship”とは「開発」、教育、資源、ス

キル、文化、テクノロジーなどの不足を問題にする。これに対し、西洋中心的な世界観の再生産を問題視するシティズンシップ教育を“Critical Global Citizenship”として区別する。後者は搾取と強制的な権利剥奪を生み出し、維持し、差異を排除する複雑な構造や制度、権力関係を批判するシティズンシップ教育を指す。それゆえ、英国に比べ「自治」や「奉仕」の伝統が不足していると感じていた奥寺のスカウト教育論にみる国際主義は、日本において西洋中心的な世界観の再生産を伴う Andreotti が言うところの“Soft Global Citizenship”の域を越えないものであった。このことは西欧を参照することで達成しようとした近代国民国家形成期における限界と言わざるを得ない。

それでも、英国流を基調とするスカウトを意識しつつ、ファシズムに抵抗し、その上でアスレティシズムのアダプテッドな受容の在り方を模索し続けた彼の著述が死の直前（1936 年 7 月 11 日逝去）まで続いたことを考えれば、奥寺は先行研究が言及したような「国際平和主義と国防国家主義」の均衡論者であったというよりも、そこからやや“Critical Global Citizenship”に踏み出し、国内の軍国主義的動向には相対的な立場をとることができたと言える。その意味において、彼は国内で新たに生じつつあった国際的軍事同盟の方向性に対して批判的視座も持ち合わせていたように思われる。奥寺は英国由来の市民教育が将来の日本の社会教育に展望を与えるという信念―英国が「正常な社会教育」、ドイツ、イタリアは「これ等［ファッショ党のバリラ、ナチスのヒットラー・ユーゲント］は政権を維持せんとする革命時の横道」―を貫こうとした。この意味で、奥寺にとっては、彼のスカウト論が限界を迎えたというよりも、彼の死後、ファシズムの影響をより強めた少年団運動の側が、奥寺の推奨した良質な市民教育を瓦解させてしまったと言える。

以上、スポーツ教育思想、アスレティシズムが第一世界大戦の直前に市民教育に消化された過程を重視した概念、アダプテッド・アスレティシズムとその日本的伝播と奥寺のスカウト論について明らかにした第一部と奥寺のスカウト論にみられた戦間期の国際主義の特徴について考察した第二部を合わせて考えるとき、奥寺におけるボーイスカウト論は以下のように総括できる。

先述の通り、Hickey らによるアダプテッド・アスレティシズム概念を通した探究が、日本へのアスレティシズムの伝播について論じる際にも有効な視座であるにもかかわらず、スポーツ教育思想としてのアスレティシズムが、スカウト運動を通して市民教育理念として消化され、日本に伝播した歴史を明らかにしようとする試みはこれまでなされてきていなかった。そこで本研究では、英国内において階層縦断的な伝播を通して消化された「市民教育としてのアスレティシズム」（垂直方向）の大英帝国外への横断的な地理的拡大（水平方向）という観点から奥寺のボーイスカウト論の分析を試みた。すなわち、彼のボーイスカウト論はスポーツ教育思想としてのアスレティシズムがスカウト運動を通して市民教育理念として消化され、日本に伝播したアダプテッド・アスレティシズムの歴史であったと言える。

具体的に、これまでは日本におけるボーイスカウト運動の歴史的展開を通じて、奥寺は黎明期のスカウト運動の理論形成に役割を果たしたとされてきた。本研究は奥寺のボーイスカウト論を詳細に検討することにより、以上の意味は、英国のエリート教育機関から学校スポーツにおけるアマチュアリズムを通じてスポーツ教育思想が伝播したという説明が単純すぎることを解明した。すなわち、英国におけるスカウト運動の労働者階級の包摂を通して、アスレティシズムの階層縦断的な拡大が生じ、その過程でアスレティシズムは市民教育に適合する形で変異し、消化された普遍性を帯び、とりわけ、国際協調時代の国際平和理念とも接合する形で世界化した過程が存在した。奥寺に見られるこの過程へのこだわりは、ファシズム期の彼のスカウト論として持続性を帯びた。つまり、各国が独

自のスカウト運動を展開する中、日本においては、ファシズム期にヒットラー・ユーゲントやバリラ運動と適合したと片づけられるものではないことを意味している。そこには葛藤と抵抗の跡が残されていた。しかも、普遍的なスポーツ教育思想との接合は、むしろ大英帝国の外側にあった日本の方が純粋な平和理念として受容しやすかった可能性を炙り出してもいる。もっとも、日本においても戦間期に世界の至る所で展開された青年教育、スカウト運動が第一世界大戦後の欧州における危機感から国家総動員体制としての銃後の備えを意識したことは、田中義一らによる青年教育への関心として、無視できないものがある。このことを否定するものでもない。但し、各国の思惑とナショナリズムが交錯する外交的な国際協調主義の中で生まれたスポーツ教育による国際平和主義が、奥寺龍渓のようなボーイスカウト論者によって、ボーイスカウト運動の意義として普及されたことは、大英帝国から遠く離れた日本におけるボーイスカウト運動の歴史とアスレティシズムの世界史を結びつけるという意味で重要な発見であった。

しかも、「独自の国際主義」、「独自のアダプテッド・アスレティシズム」は各国の実情に応じて、変容できることを容認したとしても、そこに変わらない原理としての「余暇の訓練」があったことを忘れてはならない。つまり、彼にとって、スカウト訓練は、遺作「訓練の組立」の中で述べた通り、「深奥難解の科学でない。正しく理解するならば、寧ろ、愉快なゲームなんだ。同時に、教育的であって、慈悲と同様に、與うる者にも、受ける者にも、為めになる傾向を有している」という地平から離れ得ぬ「独自の国際主義」、「独自のアダプテッド・アスレティシズム」であった。この単位を礎に近代の自治のしくみが構築されるという信念を奥寺は抱いていた。

以上のことは階層縦断的かつ文化横断的なアダプテッド・アスレティシズムの交差を問題にすることで得られた新たな研究視角によって、はじめて明らかになったと言える。